

令和 3 年 5 月 12 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K03064

研究課題名(和文) 中世後期の禅律僧と葬祭仏教の基礎的包括的研究

研究課題名(英文) Basic and Comprehensive Study of Funerary Buddhism by the Zen and Ritsu sects of Buddhism in the Late Middle Ages

研究代表者

島津 毅 (SHIMAZU, Takeshi)

大阪大学・文学研究科・招へい研究員

研究者番号：90794024

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：

本研究では、中世後期の禅律仏教を核とした葬祭仏教化の形成について検討し、以下のことを明らかにした。中世後期の葬送の変化は、禅律系寺院の境内に墓地が設けられ、多様な階層の人々が葬られる端緒となるものであった。そして日本仏教が葬祭仏教として成立する画期をなすものであった。この前提として、貴族社会における中世的な「家」の成立などの社会基盤の変化があり、家族の誰もが、境内墓地を抱えた寺院による葬送に組み込まれていった。15・16世紀以降には、一般庶民も境内墓地へ埋葬されるようになっていき、中世後期の葬送墓制の変化が近世の寺檀制度につながっていく、社会的な下地になるものであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、近世仏教の葬祭仏教に対する再評価が進んでいる。ところが、中世仏教がどのような過程を経て近世の葬祭仏教へ移行するののかについては、ほとんど研究が進んではいなかった。本研究は、天皇家・女性・幼児という具体的な対象を通して、中世仏教が葬祭仏教化していく歴史的過程を明らかにした。しかも、本研究は社会との関係性に重点を置きながら検討したため、これら葬送を担ってきた禅律系寺院の対応も、当時の社会的なニーズに応える形で進められてきたことも解明することができた。これは、日本仏教と民衆との関係を再考するうえでも、重要な意義をもつものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study examines the formation of funerary Buddhism with Zen-ritsu Buddhism at its core in the late Middle Ages, and clarifies the following.

(1) The change in funerary practices in the late Middle Ages was the beginning of the establishment of cemeteries within the precincts of Zen Buddhist temples and the burial of people from various walks of life. It also marked the beginning of the establishment of Japanese Buddhism as funeral Buddhism. As a precondition for this, there were changes in the social infrastructure, such as the establishment of medieval "households" in aristocratic society, and every member of the family was incorporated into the funeral service at temples with cemeteries on their premises. (3) From the 15th and 16th centuries onward, the general public also began to be buried in temple cemeteries, and the changes in the funeral and grave system in the late Middle Ages provided the social groundwork for the temple and parish systems of the early modern period.

研究分野：日本中世史

キーワード：禅律僧 葬祭仏教 葬送祭祀 境内墓地 天皇・上皇 女性 幼児

1. 研究開始当初の背景

- (1) 中世史研究では、国家権力を分有する権門としての顕密仏教が中世仏教の中心であったことが黒田俊雄によって明らかにされ、以来、膨大な研究が積み重ねられてきた。こうしたなか近年、中世後期における禅律僧や彼ら禅律仏教の個別研究が進展し、顕密体制を相対化する「顕密禅」体制論や「禅教律」十宗論が提起され、禅律僧が中世仏教および中世社会の特質を考察する重要な研究素材となっている。
- (2) 禅律僧とは、禅僧や律僧、時衆、念仏僧等の総称であるが、彼らに共通する重要な宗教活動として、死者を葬り(葬送)、弔う(追善廻向)という葬祭仏事があり、彼らの性格を大きく規定している。だが従来の中世史研究では、この死者を葬る葬送を、それに携わった僧侶の視点でしか捉えていなかった。
- (3) これまで報告者は、8世紀から16世紀までの葬送を素材として、それに携わった顕密僧や禅律僧のみならず遺族・近親、近臣等の立場それぞれから、死者や葬送に対する観念やその仕組みについて多面的に研究を進めてきた。その結果、葬送が僧侶と俗人の分業によって行われる僧俗分業構造であったこと、そして、14世紀初頭頃に僧分の担い手が顕密僧から禅律僧に代わり、しかも葬送全体の進行を統括的に指揮する者が俗人から禅律僧に取って代わるという画期を迎えることを解明した。
- (4) このように中世後期における仏教の基本的な特徴と社会の特質を的確に解明するためには、中世社会における葬祭の意義を明確にしたうえで、葬祭を素材とした禅律僧研究を進めていくことが欠かせない作業と言えるものであった。

2. 研究の目的

本研究は、中世日本における葬祭仏事の全容と葬祭仏教としての形成展開とを、禅律僧の活動、寺院・墓地における葬埋葬の実態、遺族と寺院・墓地との関係など多角的な側面から検証し、葬祭仏教として展開した中世仏教の特徴、及びそれを支えた中世社会の特質を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

次の二つの側面から研究を進める。

第一に、禅律僧が携わっていくことになった葬送の事例分析から、禅律僧による葬祭活動の全容を明らかにする。

第二に、禅律系寺院と墓地における埋葬事例の分析から、被葬者と葬埋葬の関係、遺族と寺院との関係を明らかにし、墓地や寺院など葬祭が行われた場の果たした役割を解明する。

4. 研究成果

この研究期間において、次の4つの拙稿を発表したので、それをもとに研究成果の概略を記す。

- (1) 「古代中世の葬送と天皇・上皇 君臣関係の視点から」(『新しい歴史学のために』294号、2019年)

8世紀から16世紀末までの天皇と太上天皇の葬送を取り上げ、その様式が天皇や上皇の権威と密接に関わることから、それが公家や武家の葬送とは異なる、一貫した様式が存在することを明らかにした。

それにもかかわらず、葬祭仏教化の観点からは、禅律系仏教としての泉涌寺の境内墓地に埋葬されるように変化していた中世後期の天皇家の葬送に、上皇までもが参列参会できるように変化していたことを明らかにした。

- (2) 「古代中世の葬送と女性 参列参会を中心として」(『史学雑誌』第129編第1号、2020年)

ここでは、古代中世の葬送において女性がどう関わるようになっていくのかを取り上げた。そのため、8世紀から16世紀末までの葬送事例を通して、女性における葬送への参列参会の実態と変化を追究し、その背景を葬送の性格と女性の位置という二側面から考察した。

その結果、9世紀半ばと13世紀半ばの二度の画期があり、そこには女性の立場と葬送それぞれに変化のあったことを明らかにした。ことに12世紀以降、中世的な「家」の成立に伴う女性の位置に変化がもたらされ、他方、禅律系寺院が境内に茶毘所・墓地を構えたことから、寺院で葬送が完結して葬列もなくなる。

こうして13世紀後半を期に、公家・武家などの葬送では、女性親族が葬所へ参会し始めるようになることなどを解明した。

- (3) 「古代中世の幼児と葬送 「七つ前は神のうち」か」(『歴史学研究』995号、2020年)

ここでは、8世紀から16世紀末までの幼児の葬送実態及び、その他界観を検討した。その結果、以下のようなことを明らかにすることができた。

13 世紀頃まで、幼児の遺体処理には出棺儀礼に始まる葬礼を伴わず、遺体を葬地に「棄置」するだけの遺棄葬であったから、墓と呼ばれるようなものはなかった。ところが、同じ 13 世紀初頭から変化が現れ、14 世紀以降には、幼児も禅律僧によって荼毘などの葬送儀礼も行われ、そして法名も与えられて墓地にも埋葬されるようになっていた。だが、こうした変化も 14 世紀以降、禅律僧の一向沙汰による葬送形態が広がり、その葬制を支えるためにも禅宗寺院や時宗寺院による荼毘所の経営が一般化していき、墓地が都市の中心部や境内にも設けられていたことを背景とするものであった。

中世後期、貴族社会のみならず一般庶民までも、かつて遺棄葬であった幼児の遺体は墓地へも埋葬されるように変化していた。大局的に見て、中世後期の葬送墓制の変化の波は、その「尊卑」を問わず、幼児の葬法にも及んでいたことを解明した。

(4)「中世社会における穢観念と服喪 自発的触穢との関係から」(『歴史評論』848 号、2020 年)

ここでは、10 世紀半ばから 16 世紀前半までを通して、触穢と服喪との関係から検討を加え、服喪が儒教儀礼に由来しつつも、その内実は仏教の中陰期間として機能し、触穢を忌み籠る意味も合わせ持つものであったことを指摘した。

そして、顕密僧・禅律僧を問わず中陰仏事に参籠し、僧俗が一体となって触穢し忌籠りしていた。穢の忌避感を以て顕密僧・禅律僧を区分することはできないこと、すなわち禅律僧が葬祭仏事に携わることができたことを、穢忌避の有無という問題に収斂できないことを明らかにした。

このように本研究では、主に禅律僧と関係した被葬者とその遺族が、葬送祭祀に際してどのような対処がとられるようになるのかとの視覚から、天皇・上皇、女性、幼児を取り上げて、禅律仏教を核とした葬祭仏教化の形成について研究を進めてきた。

これら研究成果を要約すると、

- (1)中世後期における葬送の変化は、僧俗分業構造の変化のみに留まるものではなかった。禅律系寺院の境内に墓地が設けられ、多様な階層の人々が葬られる端緒となるもので、中世後期社会に広く受容される葬祭仏教として成立する、日本仏教の画期をなすものであった。
- (2)こうした中世後期における葬祭仏教の成立は、その前提として貴族社会における中世的な「家」の成立や女性の立場の変化といった社会基盤の変化があったればこそであった。こうした前提のうえに家族の男女を問わず誰もが、境内墓地を抱えた寺院による葬送に組み込まれていたことを示すものであった。
- (3)そして、これは家族のひとりひとりがいずれかの寺院に帰属して葬られる、近世の寺檀制度につながっていく、社会的な下地になるものであった。それを裏付けるように、こうした葬送墓制の変化が一般庶民にも及び、15・16 世紀以降には、一般庶民も境内墓地へ埋葬されるようになっていたことも明らかにすることができた。

以上のように本研究を通して、従来、研究の立ち遅れていた、葬祭仏教化という視点から中世仏教と中世社会の特質についての重要な知見を提起することができた次第である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 島津毅	4. 巻 848号
2. 論文標題 中世社会における穢観念と服喪 自発的触穢との関係から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 p 73 ~ 91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島津毅	4. 巻 第129編第1号
2. 論文標題 古代中世の葬送と女性 参列参会を中心とし	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 p1 ~ 36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島津毅	4. 巻 995号
2. 論文標題 古代中世の幼児と葬送 「七つ前は神のうち」か	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 p1 ~ 16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島津毅	4. 巻 294
2. 論文標題 古代中世の葬送と天皇・上皇 君臣関係の視点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 新しい歴史学のために	6. 最初と最後の頁 p3 ~ 24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 島津毅
2. 発表標題 中世社会における穢観念と神祇信仰 二つの触穢体系に注目して
3. 学会等名 大阪歴史学会・9月度中世史部会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島津毅
2. 発表標題 古代中世の葬送と女性
3. 学会等名 女性史総合研究会・第205回例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島津毅
2. 発表標題 古代中世の葬送と女性 その社会的関係を通して
3. 学会等名 総合女性史学会・第150回例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 島津毅
2. 発表標題 古代中世における葬制の変化と女性
3. 学会等名 仏教史学会・5月度例会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 島津 毅	4. 発行年 2017年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 356
3. 書名 日本古代中世の葬送と社会	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------